

おみずひとしずく

「どれみちゃん、ファイット！」

あたしが声かけたら、どれみちゃんが頭かきながら、ちょいと振り返ったわ。

いつものおだんご　　っと、シニヨン頭、やったな。高校でまた会ってから何度かなおされたけど、昔からの呼び方っちゅうのは変わらんもんや。

「ええ返事だと、ええな　　」

遠くにちいちゃくなつてく背中を見送ってから、あたしはMAHO堂に戻ろうと振り返った　　はずなんやけど、目の前には顔がアップになってて、

「なんの返事？」

うわっっ!!

「おんぷちゃん!! い、いらっしやい!!」

思わず言つてもうてから、あたしは慌てて口おさ

えて謝ったわ。びっくりしてたら、まるで来たらあかんみたいやからな。

おんぷちゃんも、すぐ笑ってMAHO堂のとびら開けてくれたんやけど

「いらっしやい、か　　」

MAHO堂のとびら開けながら、ぼそつて言ったんが、ちょい耳に残ったつた。

「おお、来たかおんぷ。それじゃ、あとは任せるぞ」
あたしらがMAHO堂に入ったら、レジの前にはたマジヨリカが、すぐに奥に引つ込みよつた。

おや、ちちゅう顔のおんぷちゃんが、空いたレジに座つて、奥を覗き込んでるなあ。ああ、最近の様子には知らんのやな。

「ここんとこ、ずつとこつやで。あたしだけんときは居おるんやけど、他にだれか居るときは、すっく引つ

3 おみずひとしづく

込んでまうわ。やっぱ歳なんかなあ?」

「そうじゃないかもね」

くすくす笑^{わら}てる、おんぶちゃん。そか、マジヨリカも氣い遣うようになったんやなあ。

それにしても。

「どないなるんやろなあ、どれみちゃん」

「さつき、返事^{こたへ}って言^いってたわね。それじゃ、いよいよ?」

店の奥にあつた丸椅子をレジまで運びながら、口からこぼれてもつた言葉を、おんぶちゃんが拾^{ひろ}つた。

そういえば、MAHO堂の表で訊^きかれたんやつた。どれみちゃん、みんなに話^わしてたわけやないんか。

「せや。告白^{こひ}の返事^{こたへ}、小竹^{こたけ}くん^{くん}に直接^{じき}訊^ききに行^いつたんや」

「やつと、ね」

「あたしらが、あんだけ突^ついてやつと、や。悪い結果^{けい}やつたら怒^{いか}鳴^なりこんだるか、て思^{おも}うけどな」

あたしが言^いつたら、ふふふ、て、あきれたみたい

な顔^{かほ}で笑^{わら}てるわ。

「逆にうまく行き過ぎも困^{こま}りもんやな。いきなり襲^{おそ}いかかる、ちゆうのはないと思^{おも}うんやけど」

あきれついでに軽口^{けいこう}でも叩^{たた}いたろ、思^{おも}てそう言^いうたんやけど、いきなりおんぶちゃん^{くん}の顔^{かほ}が變^かわつて、

「そもも言^いえないわ」

「そつかあ? 小竹^{こたけ}くん^{くん}はそんな甲斐性^{かいせい}があるように見^みえへんで」

「そうじゃなくて」

んあ?

「本能^{ほんのう}つていうのかな どんなにやさしいオトコの人^{ひと}でも、襲^{おそ}いかりたくなることはあるんだって、ママ^{ママ}が言^いつてた。

だから、誘^{いざな}つてますよ、つて見^みえるようなことはやらないであげなさい、って」

あー

中学^{ちゅうがく}の頃^{ころ}を思^{おも}い出して、あたしはちよいため息^{ためいき}ついでしもた。あたしが直接^{じき}の被害者^{ひがいしや}やないけど、

「オトコノコやからなあ」

思い出したら頭重おもあなってしてもて、レジの机の上にあご乗せて休んでたら、ドンツて音と一緒に声が帰ってきた。

「ええ、オトコノコだものね」

目の前に出てきた魔法ねんど、ため息の分もぶつけたるか、て思いながら、あたしは思い切りこね始めたわ。

「はあ。どれみちゃん、どないなつたやるなあ」

「あいちゃん、それ5回目」

あ、言われてしもた。

魔法ねんどこねくつて、なんも考えんとアクセサリのもと作ってるつもりやったのに、なんや勝手に声になってまうなあ。

「あー、あはははは」

「笑ってごまかさない。心配なのは、あいちゃんだけじゃないんだから」

おんぶちゃんの顔、いつもよりわざと澄ましてるんも、見え見えなんやけどなあー。

「もちろん、わたしたち以上の人もいるけどね」

そう言つて、おんぶちゃんが店の奥う指さした。

ああ、なるほど。がたがた音がしてるやないか。

「落ち着け、いうたかて、無駄やろうなあ」

「『わしゃ落ち着いてるわいっ！』 って言い返されるのがオチよ。全身ふるえながら、ね」

お互い笑つて、ため息ついたのも同時やった。

「オトコノコやいうても、ほんまにすぐえろえろ、ちゆうことはないと思うんやけどなあ」

「えろえ って、あいちゃん！」

あ、目えが冷たいわあ。あたしも、ちよい考えんといかん。

「そんなことにならん、てことや。」

小竹くんは隣のクラスやし、あたしもよお見てる

けどな。いきなりサッカー部のレギュラーになるわ、練習試合で大活躍するわで、女の子にきゃあきゃあ騒がれとんねやで。せやけど」

「せや だけど？」

あはは、大阪弁うつつてもうたかな。

「自慢やないけど、うちの学校、かわい子多いんや。それが十なん人も詰めかけて、練習の邪魔になりそうなくらいの騒ぎっぷりなのに、浮いたはなしどころか、女の子と一緒に歩いてるところかて見たことあらへん」

「それって 女の子が嫌い、じゃないわよね？」

あー、そう思ってる子おもいるみたいやな。BLやつたっけ？ 変な話のネタにされてるとか、信ちゃん言うてたわ。せやけど、

「そうやないのは、あたしらよあ知つとるやろ」

「それじゃあ」

「ズバリ。他の女に興味あるて、誰かさんに誤解させへんため、やな」

人差し指い、ピシッと立てたあたしを見るおんぶちゃん、顔がぼかーんてなつとんなあ。ま、気持ちはわかるけどな。

「つまり、そういうことね」

あたしは、机にあごぶつけるくらい思いっきりうなずいた。あたしから見たら、もう犬も食わへん、ちゅうヤツやから。

「でも、どれみちゃんから告白したのは、いいことだと思っわ」

「そうでもされんと、自信もてへんのやるな、小竹くん わかる気いするけど」

「そうね。本当に誰のことでも心配して、誰のためでも頑張っちゃうから 自分に対してが一番なんて、わたしだったら自信持てないわ」

おんぶちゃんが自信持てへん、ちゅうのは相当やなあ けど、ほんまわかるわ。あたしかて、しょう

ちゅう大親友で言うてるけど、ほんまに大親友でいてくれるんか、ほんのちよつと心配やったくらい

やからな。

「小竹くんは、大丈夫よね。いまは」

「いまはなー。覚悟決める前に、あたらしい子おに会ってしまったんこと、祈るしかないか」

ふたりして、レジの上に頭乗せてひとやすみ

「なにサボってるんじゃ、お前たち！」

おっと、マジヨリカや。いつの間に奥から出てきよったんやろ。

「心配せんでも」

え？

「どれみの相手なら、わしもフラも見たいわい。あれはそうそう、外れる男じゃないぞ」

「そうねえ、ちょあつと臆病だけど。どれみちゃんに對してだけは、ね♡」

あ、あはははは。フラにまで言われてもうつてるやん。

「いずれここが、どれみたちの逢引あひびきの場所になるんかのあ はづきだけでなく」

ん？

なんやマジヨリカ、いまぼそつ、て

「はづきちゃんたち、ここで会ってるんだ」

おんぶちゃんの言葉に、マジヨリカがはっ、つちゅう顔した、て思たらいきなり背中向けて、

「ん、んっ！ わしゃ、なーんも言っていないぞ。それより仕事じゃ、仕事！」

そのまま、ばーつ、と奥に引っ込みよつた。

ははーん。こら、隠れて覗いとつたな？

「あとで、はづきちゃん問い詰めよつか」

ああ、おんぶちゃん、悪い顔になつとんなあ。

「矢田くん、ここに誘い込んでからにしよ。今度なんとかしてみるわ」

こら、乗らなあかんやろ、な

「恐ろしい奴らじゃな」

変なこと聞こえた気もしたけど ま、気にせん、気にせん。

「お似合いだとは思ってたのよね。小学校の頃から」

「おんぶちゃんも？ あたしもや。どっちかっちゅつと、はづぎちゃんたちよりも、こっちが先にまともるんやないかー、なんて思ってたくらいやからなけど」

あたしの目の前で、おんぶちゃんがしっかりうなすいたわ。

「そう。ひとの気持ちは変わるわ。中学に入って、高校に入って、どんどんいろんな人と出会えば、小学校での気持ちなんて、どこかに行っちゃうかもしれない」

「行って欲しない、ちゅうのはワガママやからな」
「わたしのファンだった人たちも、そうだったわ。歳の近い子は特に、ね」

あたしは、思わずため息ついてまうの、我慢した。

「あたしらは、大親友やからな」

「ええ。同じ経験をした、誰より強く結びついた仲間よ。だから、みんなのことは心配してな」

そう言いながら口元だけ笑てる顔お見てたら、あたしの手が勝手に動いたわ。

「うりゃー！」

「え？ あ、あははっ」

一瞬、自分でもなにしろんかわからなかった。

けど、せやな。これでええんや。

「ほい、ほいっー！」

「ちよ、ちよつとやめ、脇を突付かな あはははっ」

「さあ、どうや」

「どうや、じゃ ないわ よ。ふう、はあ」

息も絶え絶え、ちゅうヤツやな。けど、さっきよ

り、ずっとええ顔や♡

「ちつとはあたしにも心配させんかい！」

おんぶちゃんほどやないかもしれへんけど、あたしかて、いろいろあつたんやでー」

「え えるえるなこと？」

こだわるなあ、おんぶちゃん。

「それも含めてや、て言うたらどないする？」

9 おみずひとしく

「いろいろ、あるわよね。15年も生きていれば
まあ、せやな。」

あたしがうなずくと、おんぶちゃんの声が、優しゅうなつて、

「イヤなこと、あった?」

自然と、口元が笑わらてしまつ。あたしも、あかんな。

「あったのね」

「おんぶちゃんや、どれみちゃんがいたらええのになー、て思ったこと、一度や二度やあらへんな。そやけど」

あたしは、そこでちよつと考えた。中学の3年間で思てたこと。好きな陸上より、心配やったことうん。おんぶちゃんになら、言つてもええやろ。

「あたしの一番は、高校まで変わらへんかった。けど、どれみちゃんは、どれみちゃんの一番は、小竹くんにならんかもしれんな」

言つてからしばらく、MAHO堂の中から音が消

えてしもた。

「どれみちゃんつて、一滴のお水だと思わない?」

静かなMAHO堂に、最初に聞こえてきたんは、おんぶちゃんの澄んだ声やった。

けど、おみず、て

「ん、そらたしかに、どれみちゃんは惚れつぽいけどな。そない尻軽やない思」

「違つ違つ。そつじやなくて、ねえ、あいちゃん。川がどうやってできるか、知ってる?」

かわ、て、流れる方の川、かあ。川がどないしてできるか、て、なんや?

「川がどこから来るのか、探したこと、ない?」

あー、そついえは。

「あるで。ちいちゃいころ、お父ちゃんに連れられて、山に登つてな。だんだん川が細おなつていつて、

しまいには消えてしもた」

「川によつては、そうなるわよね。わたしも、パパと一緒に登ったことがあるの。その川は、途中で消えなくてね。最後の最後には、岩から水が染み出しただけだったわ」

染み出してる

一瞬、あたしの前に、水の玉が見えた。透き通つてて、気持ちよさそうな玉や。

「一滴、一滴、ほんのすこしだけのお水なのに、まわりのお水をまきこんで川になって、最後には海になる

ね、どれみちゃんらしいでしょ？」

ああ。そういうことかあ。

「それ、わかるわあ。どれみちゃん、よお自分になんもないー言つてるけど。自分には一滴にしか見えへんのやるな」

そやから、すうぐちりよるけど　どれみちゃんの水玉は、川になって海になる水玉。うん。

「わたしたちは、大親友、でしょ？ 川になるために巻き込まれる中心にいるのよ。どれが一番でも、ほんのちよつとの違いでしかないわ。きつと」

お団子つけた水玉が、目の前でくるくる回つてるような気がする。

「巻き込まれるのが役目、ちゅつわけやな　そら、たしかに一番もへったくれもあつたもんやないわ」

「なんや、肩が少し軽うなつたみたいや。

「でもやつぱり、一番にはなりたいたいけれど、ね♡」

「せやな　よっ、しゃ！」

「パンツ、て両方の頬を手のひら打つて、あたしは一発、気合入れた。

「一番二番は、まず顔を見てからや。作りかけのアクセサリーぜんぶ焼いて、戻ってくるの待つとしようか。それと」

「アクセサリー持つて立ち上がったあたしを、おんぶちゃんがじつと見てる。なんや、カクくなつてくるけど　ええい！」

「さつきは、ごめんナ。MAHO堂は、みんなが
帰るところから、挨拶は『おかえり』や。おんぶちゃ
んも『ただいま』言つてやー」

「うん♡」

言い切つてそのまま店の奥に歩いてくあたしの後
を、済んだ声が追っかけてきた。

カラン カラン

ドアベルがちつちやく鳴る音で、あたしとおんぶ
ちゃん顔上げた。ふたつの視線の先で、おだ

シニヨン頭が、そーっと入つてきよる。

ほいじゃ、せえ、のお

「おかえりー！」

シニヨン頭がびくつ、となつて、ゆるっくり顔が
上がつてくわ。

さあて。どつちや、どれみちゃん？

「た、ただいまー。
ねえ、国立くにたちつて すぐ近くだよねえ？」

あたしは、思わずおんぶちゃんと顔見合せてし
もた。

「まだまだ、決まりそうにないわね、一番
やれやれ、いつ笑顔が、なんや妙に嬉しかったわ。

—おしまい—